

フリーア美術館所蔵高尾太夫図について

鈴木 淳

1. 高尾太夫図

米国フリーア美術館所蔵の肉筆浮世絵「高尾太夫図」は、奥村政信筆の美人図に、半世紀も経ったのちに吉原扇屋の遊女花扇が沢田東江流の書をもって賛を認めたものである。本稿は、この賛を中心に考察することによって、花扇をして政信図に着賛せしめた意図を探ろうとするものである。

本図は絹本着色、縦104.2×横39.5cmで、落款は「日本画工奥村政信図」に白文瓢箪印「奥邨」と朱文方印「政信」の二顆を押捺する。旧来、政信の真作と見られて来たもので、稿者もまったくそのことを疑う者ではない。描かれるのは太夫、禿、供の者の三人による道中である。太夫は兵庫髻に櫛と簪を挿す。小袖を重ね着し、上は丁字と緑の地色を継ぎ、草花、飛蝶それに緋色の房などの文様を複雑に織り出した打ち掛け。下は、細かい縞の入った緋色地に黄金色の稲穂と楓の家紋を織り出したもので、上着の紅裏と溶け合って鮮やかこの上ない。また下着は湯帷子^{ゆかたびら}で、帯は黒地に種々の小紋をあしらう。禿は、黒地に緋色の八橋と若松文に、やはり丸に楓文を付した紅裏の振袖で、袖の中程を紐で結ぶ。帯は鼠色に亀甲文である。供の者は、糸鬢^{いとびんやっこ}奴風^{やつこ}に広く剃り込んだ髪形に、松に一字、松葉文、イロハ文などを細かく散らした、縹色の丈の短い木綿織を腰の辺りでたくし上げ、丹色で楓文の入った日傘を太夫の上方にかざしている。供の者の簡素な風采が、太夫や禿の豊麗、華奢な姿態と際立った対照を成しているのは、吉原の風俗をそのまま写し取ったものとは言え、いかにも政信らしい、めりはりの利いた筆使いと言える。



図1 「高尾太夫図」(フリーア美術館蔵)

いまこの図を、享保十九年刊、政信画『繪本金竜山千本桜』^①の下巻（「繪本新吉原千本桜」）の一図「道中盛若木の桜」と比較してみると、太夫、禿、供の者の三人の配置、それに供の者がかざす日傘もそっくりである。また三人の衣装や髪形もおおむね同じく、とくに振袖の禿の姿態は、彼から此へ移して来たかの感すらある。しかし、子細に眺めると、異なる点も少なくない。すなわち肉筆図の方が三人とも裸足であるのに対し、版本の方は、それぞれ太夫が高下駄、禿が木履^{ほつくり}、供の者が草履を履いていること、また禿の帯が版本では見映えがしないこと、太夫の髷^{たはげ}が、肉筆の方は長く張り出しているのに対し、版本の方は丸みを帯び、さほど目立たないことなどである。政信の意識からすれば、肉筆の道中図はそれなりに古風を心がけて描いたと言えようか。

本図に描かれた太夫は、太夫、禿の衣装、それに供の者が持つ日傘に染め出された丸に楓文によって、吉原京町一丁目の妓楼三浦屋四郎左衛門抱えの名妓、高尾と考えられて来たが、それに誤りはあるまい。西鶴の天和二年刊『好色一代男』七ノ四に「新板の紋尽くし、紅葉は三浦の太夫」^②とあるほか、紅葉が高尾の紋であったことを示す資料は多い。花扇の賛にも「高尾ぬし」と記すごとくである。問題は、寛永年間以降、寛保年間に至るまで計十一代を数える高尾の名跡のうち、何代目に当たるのかということである。本図について最初に解題を試みたハロルド・ア・スターン氏は、三代目とされた^③が、同氏は花扇の賛に基いて推定されたうえに、二代と三代を混同していたふしがある。享保年間と考えられる政信画と、天明年間と目される花扇の賛とは、ひとまず切り離す必要があるだろう。かつ政信が描いた高尾が何代目であるかは、今のところ特定する資料に乏しいと言うほかはなさそうだ。



図2 奥村政信画『繪本金竜山千本桜』

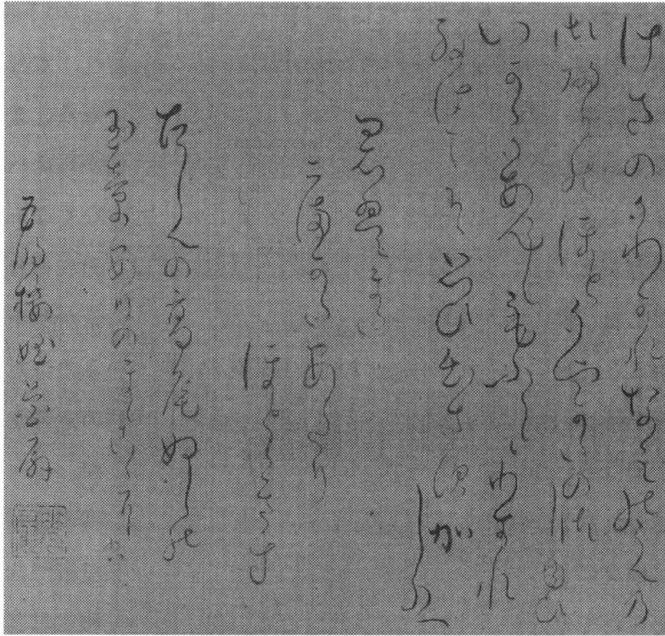


図3 「高尾太夫図」の花扇賛

さて花扇の賛は次の通りである。

けさの御わかれ、なみのうへの御帰りのほど、御やかたの御しゆびいかが、
御あんじもふし候、わすれねばこそ思ひ出さず、かしく

君はまだこまがたあたりほとゝぎす

古しへの高尾ぬしの玉章、ありのまゝこゝに書

五明楼姪花扇（印）

落款印は白文方印「華扇」で、この印については、後に今いちど触れることになる。書風は近世の中後期、唐様書家として名声を振った沢田東江の流儀であり、草仮名風の文字を交えつつ、丸みがあった寛緩とした字体で認めてある。注記によれば、高尾の書簡をそのまま所掲したというが、真偽のほどは定かではない。ただし本書簡が、二代目の万治高尾が馴染の仙台藩主伊達綱宗に宛てたとやがて信じられるに至ったものであることは事実である。おそらく、花扇

が着賛する時には、すでにそのように見做されていたものと思う。

2. 高尾の艶書

そもそもこの書簡は、さほど古くから知られていたものではあるまい。相似た文面のものが、大田南畝の『一話一言』七の「遊女三浦屋高尾手簡写」と、松浦静山の『甲子夜話』二〇に見える。いま『一話一言』から引くと、

けさの御わかれ、なみのうへの御帰路、御やかたの御しゆびいかゞ御あんじ申候。わすれねばこそおもひ出さず候。かしく

高尾

千里さま

の^④ごとくである。同書七の巻末には「天明四五年の頃集む」とあるので、南畝がこの書簡に出会った時期が知られる。情報通で遊里の事情にも詳しい南畝のことであるから、天明四、五年すなわち当該書簡が世上に流布した時期と考えられる。ちなみに京伝作画、天明四年刊の黄表紙『不案配即席料理』には、高尾の提げ斬りの趣向が描かれるが、この書簡に関わる内容は見えない。

宛名の「千里」については、『甲子夜話』所掲の同資料に「右千里とは陸奥侯のよし」^⑤の注記が存し、さらに静山の注に、

侯とは仙台の綱宗朝臣なり。浪の上とは舟行して本邸に還られしを云ふ。とある。綱宗が千里という表徳を持っていたことは未確認であるが、『誹風柳多留』二四11甲の「つな様といふ文高尾かゝぬなり」^⑥という制作年未詳の句が示す通り、大名の綱宗はもとよりのこと、嫖客が実名を憚るのは言うまでもないことだ。ともかく一般にこの書簡は綱宗宛と受け止められていたらしい。全体の文意は、今朝のお別れ、舟でお帰りでしょうが、屋形船のやり繰りはいかが、心配しております。忘れることはありませんので、思い出すということもありません、というものである。

文中の「わすれねばこそおもひ出さず」について、為永春水の『春色梅暦』は「わすれねばこそ思ひ出さず候、とは名妓高尾が金言」^⑦と称赞するが、福田秀

一氏の御教示によって、実はこれには先蹤があったことが知られる。すなわち室町時代の小歌集『閑吟集』に「思ひ出すとは忘るるか、思ひ出さずや忘れぬば」^⑧とあるのをはじめ、『異本洞房語園』下の朗細（弄斎）にも「思ひ出すとは忘るる故よ、思ひ出さぬよ忘れぬは」^⑨とある。よってこの文言は古くから遊廓に伝えられた歌謡の一章に基いた可能性が高い。

また「君はまだこまがたあたりほととぎす」の句は、文面と合わせて理解すれば、御屋敷に御帰りになるあなた様は、まだ駒形辺りにいらっしゃることでしょうが、早朝の空にはほととぎすが鳴いていますという意味になる。この句は、今日では人口に広く膾炙しているものの、『一話一言』や『甲子夜話』には未載である。わずかに文宝亭がまとめた『高尾考』の巻末に引かれる書簡類の最後の一通が句入りで、宛名には「御やかたの君え」^⑩とある。ただ句は「君は今駒形あたりほととぎす」とあり、一般にはこちらの方が流布しているようだ。ともあれ一通の書簡が、これだけ句の有無や文言、宛名の相異をもって伝えられるのは、それだけこの書簡が天明以降、小説、音曲、芝居など多様な媒体で流布したことを示唆するものであろう。

ところで、この書簡に従えば、綱宗はどのような径路で屋敷へ帰ったと想定すべきであろうか。終点は、新橋汐留^{しおどめ}にあった伊達家の上屋敷までということになるが、起点はどうか。ふつうに考えれば、金竜山すなわち待乳山^{しやうてん}聖天手前の船宿から、浅草川（隅田川）を経て新橋汐留まで戻ったと考えられる。延宝六年刊の『吉原恋の道引』にも、金竜山からの船賃がいろいろ記されるなかに、

一、新橋より同所まで 三匁五分 〈同断〉（但二丁ろ 帰は壱匁）

と^⑪あり、少なくとも延宝年間以降はこれが一般的な手段の一つであった。「二丁ろ」とは二挺櫓のことで、『好色一代男』七ノ四に「金竜山を目当^{めあて}に浅草川の二挺立、駒形堂も跡になして日本堤にさし懸り……」^⑫というのは、二挺櫓の猪牙船が三谷堀へ乗り入れ、日本堤の取付き場に漕付けをいったものである。ただし、猪牙船では、書簡に「御やかた」すなわち屋形船とあるのにそぐわない。

また「君はまだ駒形あたり」の表現からして、駒形で船をしつらえて帰ったとする方が、よくはないだろうか。「駒形あたり」というのは、駒形の付近の意ではなく、駒形そのものを少しおぼろに表現したもので、より具体的にいうなら、あなた様はまだ駒形で屋形船が準備されるのを待っていらっしやることでしょうかの意になる。もちろん「君はいま駒形あたり」であれば、その意味合は多少、異なるものとなる。

駒形は、浅草駒形堂のある場所で、表は奥州街道筋、裏は大川端で船着き場として著名だったこと、『紫の一本』四、浅草観音堂のくだりに「駒形堂の船着きに懸けたる屋形は数しらず」¹³とある通りである。それも、ここが浅草観音の入口に当たっていたからで、観音参詣の客は、駒形で船から上がり、大通りから斜め左に切れ込んだ並木茶屋町の通りを雷門へと向かうのである。猶また吉原へ通う者も、この駒形を基点としたこと、寛文二年刊『江戸名所記』三、浅草駒形堂のくだりに「浅草川の舟つきにして、かの吉原にゆくものも猶ここの舟つきとさだむ」¹⁴と明言するごとくである。

よって、江戸もある時期までは、駒形堂で舟から降り、奥州街道を真っすぐ待乳山を目指す方法と、待乳山の舟宿で船から降りる方法とが並び行われていたと考えられる。『吉原恋の道引』に、

金竜山 一、爰にて馬よりおりて、やうすをなをし、ゑもんなどつくろひ、
心せかるゝ所なり

と¹⁵あるのは、駒形その他から馬を利用する客についていったもので、この書簡の綱宗の場合も、そのように考えるべきと思う。さればこの書簡は、句と共にそれなりに古い要素を持っていると思われ、すべてが作り物ではなさそう。先ほどの歌謡の例と同じく、吉原に古くから伝わる艶書や句に基いて脚色したと考えることも許されよう。

3. 二代高尾と伊達綱宗

さて、賛に書かれた伝高尾の書簡は、それが「高尾太夫図」に認められる時

には、二代高尾が伊達綱宗に書送ったものと受止められていたと思われる。そこでこの二人についても一わたり見て置きたい。

二代目高尾は、万治高尾とも称され、歴代高尾の中でも最も高名であるが、その没時および死因については古來說が分かれる。すなわち山東京伝の『近世奇跡考』四の「三浦高尾の考」には次のようにある¹⁶。

二代高尾 ○数代のうち、すぐれて名妓のきこえ高し。これを万治高尾といふ。貞享板（江戸鹿子）の説を用て、二代とさだむ。万治三年十二月廿五日死。或云、万治二年十二月五日死。

また上にいう貞享版『江戸鹿子』二には、次のように見える¹⁷。

高尾の紅葉 葉柴村正光院と云ふ浄土寺にあり。そのかみ吉原三浦四郎左衛門が所の二代目高尾、その身太夫の位そなわりかたちのうるわしきことはいふもさらなり。手跡は佐理行成にもおさへおとるまじく、琴三味線の秘曲は底を極め、あさか山のあさからぬ三十一字をもたどり、万にいみしき遊女なりしに、おもわずおもき病におかされ、去る万治の初つかた身まかりぬ。そのからを今の正光院の客殿の左のかたに埋て、伝誉妙心と改名して、なきあとのしるしに紅葉を一もと植置ぬ。

文中の「葉柴村」は橋場村のこと、また「正光院」は春慶院の誤りとは、加藤雀庵の『高尾追々考』¹⁸などの推定である。

二代高尾の墓は、この春慶院の四面塔のほか、「土手の道哲」が建てたと伝える三（山）谷の西方寺の地藏塔があり、没時も「万治二年十二月五日（春慶院）」と「万治三年十二月廿五日（西方寺）」の両説が並び行われ、享保十七年刊の『江戸砂子』二などでは、西方寺の方を採用していた。しかし、没時を考える上で有力なのは、万治三年春、鱗形屋刊の遊女評判記『高屏風くだ物がたり』下に見える¹⁹高尾の終焉について述べた、次のくだりを捉えて、万治二年説に軍配を上げた山東京山の説である。

ことしの秋の末つかたより、もみぢの色も霜にいためるけしきの、れいならずして、ぶらかわせしまに、いやまさりがほなれば、葉の事もてあつか

へども、いさゝかしるしとてもあらず。日にましよはりもて行ほどに、ついに、しはすのはじめの五日、御歳十九とかやにしてなく成給ふ。からをばにしきの袋に入て、あだちが原のそこそこにおさめ、今あらためて、てんよめうしんと云。万治二年極月十一日、花遊敬白

右によれば、二代高尾は万治二年十二月五日、十九歳で病死したことになる。万治三年刊の遊女評判記にかくある上は、動きようのない定説のように思われるが、没時と合わせてこの病死説にも根強い異説がある。たとえば『瀬田問答』において、大田南畝の「神田川いつ頃出来候哉」との間に対する、瀬名貞雄の答に見られる殺害説がそれである²⁰。

神田川堀切被_レ仰付_一候は、万治三庚子年二月十日、松平陸奥守綱宗之被_レ仰付_一、同年三月四日に歛初めにて、二三ヶ年も掛り出来申候。此御用最中綱宗遊宴に長じ、三浦屋二第め高尾を手討に迄被_レ致、陰居閉門被_レ仰付_一、右之堀切り子息亀千代之被_レ仰付_一候。

つまり綱宗は、神田川^{ほりわり}堀割の事を幕府より仰せ付けられ、工事に取掛ったものの、その間、遊興に耽る余り、馴染みの高尾を手討にする狼藉に及んだため、隠居閉門を命じられたというものである。綱宗の不行跡による万治三年の隠居は事実であるが、その原因をただちに高尾の殺害に結び付けるのは、史実からの逸脱にはかならない。

思うにこれは、実録物の『仙台萩』など、事実を装った文学的俗説に基いたものと見るのが一般的である。『仙台萩』には、綱宗が密かに通いつめた三浦屋の高尾が、俗名島田重三郎のちの道哲と^{にせ}二世を契る深い仲であったこと、そして綱宗が高尾の身請を強行したものの、^{みつまた}三股で船遊びの最中、高尾の不実な態度に激昂し、^き提げ斬りして水中に投げ込んだことなどが、まことしやかに記される。これらの記載は、多くは史実と異なり、風聞、俗説の世界を出ないものであるが、だからと言って簡単に切り捨てるわけにはいかない。むしろ『瀬田問答』のように史実如何を問題にする書物にすら、高尾の風説が実説として受け止められていたことが大事である。西方寺の墓説や没時の万治三年説も、

実はこの殺害説と密接に結び付いたものだ。

さらに安永期には、この『仙台萩』などに基いて、いわゆる伊達騒動に取材した芝居が興行されるに至り、それらの影響も無視できない。すなわち歌舞伎では安永七年七月、中村座初演の桜田治助作『伊達競阿国戯場』^{だてくらべおくにかぶき}、人形浄瑠璃では同八年三月、肥前座初演の達田弁二、吉田鬼眼、烏亭焉馬作『伽羅先代萩』^{めいほくせんだいはぎ}以降、好評のため、江戸でも伊達騒動物が繰り返し上演されたのである。そして重要なことは、浮世絵などがえてしてこうした俗説や芝居の世界と密着した関係にあることで、「高尾太夫図」の花扇の賛も、まずこうした俗説の上に立つものであることを、はっきり確認すべきであろう。

4. 東江流と三代花扇

ところで、「高尾太夫図」の賛の末尾に「古しへの高尾ぬしの玉章、ありのまゝ、こゝに書 五明楼姪花扇」とあったが、これは「玉章（書簡）」^{たまずさ}の内容をそのまま記すことを言ったもので、書風、筆蹟の謂ではあるまい。『江戸鹿子』二の高尾の記事中には、「手跡は佐理行成にもおさへおとるまじく、琴、三味線の秘曲は底を極め、あさか山のあさからぬ三十一字をもたどり……」²¹と、高尾が書、琴、三味線、和歌などの諸芸に秀でたことをいう。ことに書について、古来、三蹟と崇められる藤原佐理、藤原行成にも比肩するように称するのは、もとより誇張ではあるが、それでも高尾が尋常でない書き手であったことが窺われる。もちろん高尾に限らず、遊女は能書を求められたのであり、情客を繋ぎ止める上でも、彼女等は苦心惨憺して文章を綴り、それを美麗に認めて相手に贈ることを、第一の務めとはしたのである。

さて「高尾太夫図」の賛の書風は、一見して当時全盛の唐様書家沢田東江の筆意を具えたもので、大振りて丸みを帯びた字体を緩やかに書きなしている。また「もふし候」の「も」、「出さす」の「す」、「かしく」の「か」「く」、「君はまた」の「は」、「こまかた」の「ま」など、それぞれ「毛」「須」「加」「九」「盤」「満」などの字母がはっきりわかるような書き方をするとところに特色があ

る。万葉仮名を草体にしたいいわゆる草仮名風のもので、私見によれば、東江の仮名書がその流行に与るところ大であったと考える。参考のために架蔵の花扇と伝える短冊も掲げて置きたい。この短冊は、裏に別人の筆で「花あふき書」とあるものの、何代目かは不明である。歌は藤原俊成の古歌「またやみむかたの、みの、さくらかり花のゆきちる春のあけほの」であるが、そのうち「みの、」の「み」、「さくら」の「さ」、「ちる」の「ち」がそれぞれ「美」「佐(御)」「知」のように書かれている。とりわけ「佐(御)」が、「高尾太夫図」の花扇の賛の二行目の二つの「御」の字に相似している点などは、注意してしかるべきであろう。

東江、姓名は源鱗、中国伝来の王羲之の古法に則った流儀を宗として、安永、天明年間に一世を風靡したこと、伊勢^{こも}孤^の野藩儒南川金溪の『東遊日録』の安永九年四月十一日条に、

東江ハ書家専門也、頗著述ヲ能ス、書風ハ専ラ二王ヲ学ブ、尤古雅也、都下ノ書風、広沢已来其風ニ化セラレ、皆其奴隸也

と²²あるごとくである。とくにこの安永期には細井広沢およびその門流になり替って、斯界の首座に就き、数多くの法帖を出版するに至る。その大半は唐様の法帖であるが、いくつか和様の法帖があるうちの一つに、安永二年須原屋(舟木)嘉助から出された『春宴帖』²³と、その評判に乗じて天明三年に鶴屋喜右衛門から出された『続春宴帖』²⁴とがある。いずれも俗体書簡が大半を占めるが、『続春宴帖』は、後半に『伊勢物語』第九段の東下りや、『古今和歌集』雑下の抄出が十三丁ほど見られる。

いまその冒頭部分を例にとってみても、「なきものに」の「毛(も)」や、「いきけり」の「希(き)」「梨(り)」など、草仮名風の特色が顕著である。これらを「高尾太夫図」の賛

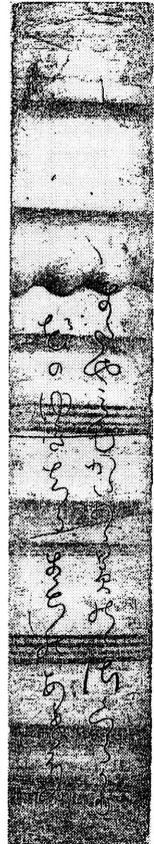


図4 花扇短冊

と比照すれば、その共通性は言を俟たない。そもそも東江は、安永、天明期、和歌、和文の仮名にも範囲を広げて活躍していたが、その教授の対象の一斑が、確実に吉原の遊女達であったろうことは、遊里文学の洒落本などに「東江流」の謂が散見されることから疑いえないところである。

さて、「高尾太夫図」に東江流の賛を認めた花扇は、いったいどんな娼妓であったろうか。花扇については、三村竹清の「遊女花扇」²⁵と、向井信夫の「花扇名跡歴代抄」²⁶という二つの論考がある。いずれも有益な

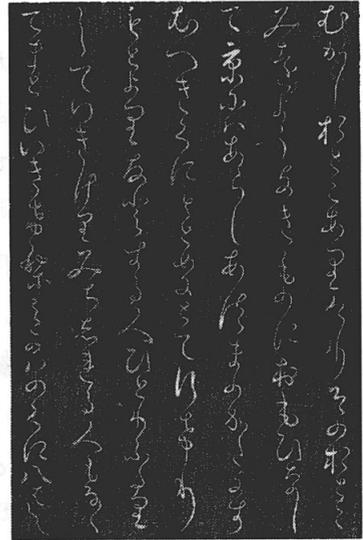


図5 沢田東江書「続春宴帖」

から多少の混乱が見受けられるが、花扇の名跡が九代まで続いたものの、とくに盛名が轟いたのは二、三、四代辺りであることなどが知られる。「高尾太夫図」の花扇が、東江流で落款印に朱文方印「華扇」を用いることを重く見ると、京伝の『傾城鱧』²⁷に載る四代目花扇が、その朱文方印を用いていないことを勘案して、二代目か、三代目を想定するのが穏当であろう。いかに同じ名跡を継いでも、雅人として同じ落款印を用いる謂れはあるまい。

二代目は、丸山季夫の「三島自寛と角田川扇合」²⁸に紹介されるように、幕府御用の呉服商で歌人の三島景雄、号自寛が主催した『角田川扇合』に招かれて、景雄と番^{つがい}になって扇と和歌を披露し、勝劣を競った遊妓である。しかし、可能性が高いのは、次の三代目である。すなわち三代目は、南畝が天明元年から翌二年四月までに書き集めた『一話一言』五に「北里扇屋遊女花扇は能書唱歌に名あり」²⁹と称される人物に他ならない。天明元年に突出^{つぎだ}して二代目を継ぎ、天明六年まで御職を張った名妓である。

そしてこの三代目花扇が、いまだ御職にあった天明五、六年頃の刊行とされる絵本、玄昧子こと市河寛齋作、磯田湖竜齋画の『北里歌』³⁰にも彼女が登場

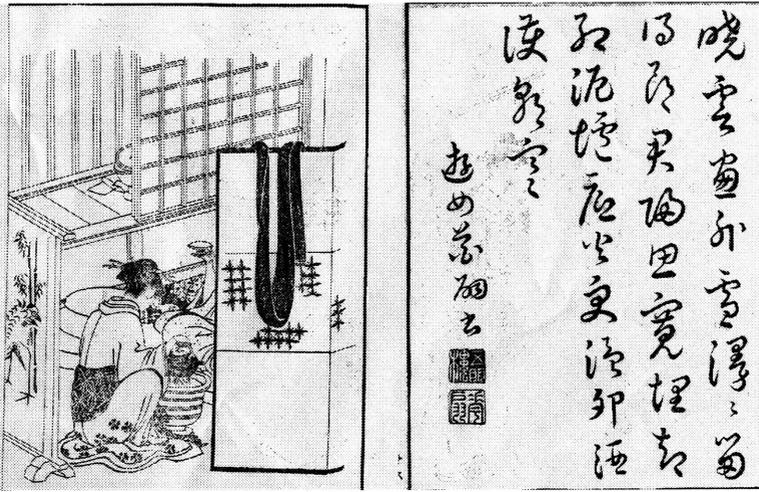


図7 「北里歌」花扇版下

から、「高尾太夫図」の賛を認めた花扇と、『北里歌』の版下を認めた花扇とは同一人である可能性が高い。言うまでもなく「高尾太夫図」から『北里歌』までを貫流する、これぞ東江流と称すべき、艶やかな筆蹟も、その証しのうちである。『北里歌』の花扇は、その刊行年が天明五、六年であることから、前述のように三代目花扇と目されるので、「高尾太夫図」の花扇も同然となる。

5. 『新美人合自筆鏡』と墨河

さて、三代目の花扇の真骨頂は、『北里歌』の少し前、天明四年初春に出版された『新美人合自筆鏡』^⑨に描かれる姿態および書に見るべきであろう。本書は、画者北尾政演（山東京伝）と版元蔦屋重三郎の連携協力によって出版された、類稀な豪華絢爛たる美人画の色摺り絵本である。やがて戯作界の寵児として、その名声を恣にする京伝と、並外れた企画力と斬新な着想によって、常に出版界の先端を走り続けた蔦重とが、たがいに知恵を絞って世に問い、時好に協って大いに人気を博した一作である。

本書の大きさは、一枚摺り浮世絵でいうと、大判二枚続き大の見開き七面か



図8 北尾政演画『新美人合自筆鏡』

らなり、各図には、妓楼ごとにそれぞれ二組の花魁^{おいらん}、新造、禿を左右に描き分け、上方の余白に和歌、漢詩等の贅が記される。また本書には、四方山人^{よものさんじん}こと南畝の序と、朱楽館主^{あけら}こと菅江の跋が添えられる。そしてその菅江の跋にも明記されるように、本書が、安永五年に出版された北尾重政、勝川春章画、葛屋重三郎刊の『青楼美人合姿鏡』の続編という意識が強かったことは疑いのないところだ。ただし、本書独自の特色として挙げるべきは、書名の「自筆鏡」からも知られるように、それぞれの花魁の自筆の筆蹟を前面に出し、それを売り物にしていることである。改めて各図を見ると、浮世絵の美人図の常として、容貌の差異はほとんど判別しがたいものの、贅の方はなるほどそれぞれに個性的であることがわかる。

このことを、第一図の花扇と滝川を例に取って見てみよう。絵柄は、吉原の大門口を二人の遊女がそれぞれ新造、禿を引き連れて歩む体であるが、中央に置かれた溜桶の被いに「あふき屋」の文字が見え隠れすることから、二人の遊女は五明楼こと扇屋宇右衛門の抱えであることがわかる仕組である。そしてそ

それぞれの署名から向かって右面が滝川、左面が花扇と知られ、かつ天明四年の刊年を勘案すれば、花扇は三代目、滝川は四代目と推定される。いずれも知人ぞ知る、当時全盛の名妓であった。二人とも目を見張るばかりの初衣装に身を包んでいるが、滝川は横兵庫鬻で、前方を見据えて歩む体であり、花扇の方は島田鬻で、下に落とした視線の先を追うと、その足下で佇む猫と、猫に向かって吠える小狗の姿がある。『傾城鱗』に次の四代目花扇について「好むもの手飼の猫」²⁹とあるのは、先代譲りでもあろうか。

さて賛は、まず滝川のは、『和漢朗詠集』上「早春」に見える白居易の漢詩句「春風春水一時来」と、『拾遺和歌集』の巻頭歌、壬生忠岑の「はる立といふばかりにやみよしの、山も霞てけさはみゆらん」である。また花扇のは『唐詩選』六の儲光羲の五絶「長安道」の句「鳴鞭過酒肆 絃服遊倡門」であるが、例の『傾城鱗』の花扇の記載に「含情無片言尤かんがふべし」とあるのも、同詩の結句であり、当時、遊郭で愛吟されたもののごとくである。また和歌は「香にはしれけさのはつ花さき初て袖に袂に匂ふ梅ぞも」であるが、これは花扇の自作であろう。そしてこれら賛の筆蹟をよく見ると、それぞれ當時たいへん有名であった二人の書家の筆法に相似していることが知られる。すなわち滝川の方は、やや筆太で大小長短を自在に書き分けた流麗な書体であり、これは紛れもなく和様書家として評判の高かった加藤千蔭の流儀なのである。一方、花扇の方は、例の繊細で丸みを帯びた宛転たる書体で、これは上述のように東江流と見て間違いない。つまり二人の名妓は、そのころ和漢の書の名手と仰がれた千蔭と東江の筆意を体得した書き手であったことになり、その和漢両様の書風を競わせたところに、本書の見所の一つがあると言ってよからう。³⁰ちなみに『傾城鱗』は、四代目花扇について、その特技を記すところに堂々と「書東江流」³¹と明記する。一方、同書に掲出される滝川は五代目と考えられ、そこに模刻される筆蹟から推してやはり千蔭流と見做し得るものの、その流儀を明記しないのは、おそらくまだ現役の町奉行与力であった、千蔭の仕事柄を憚つてのことだろう。

さて『新美人合自筆鏡』は、いわば京伝と蔦重の合作ともいべきものであるが、なお陰の企画、演出者として今一人、吉原切つての本店、扇屋主人の墨河の名を挙げたいと思う。とくに同年六月に京伝の主導によって白鳳堂から出された『手拭合』⁵⁵に花扇のほか墨河自らと妻の稲木まで揃って参画しているところを見ると、ますますその思いを禁じえない。墨河はその俳名で、狂名を棟上高見^{たかくいあわせ}といい、天明、寛政期、吉原を舞台とする詩歌俳、書画などの文化的集まりの中心人物であり、狂歌の常磐連を組織していた。

その墨河が、抱えの花扇や滝川の活動をすべて演出していたことを裏付けるものに、京伝弟の京山が書いた随筆『蜘蛛の糸巻』の「墨河が智計」の次の記事がある。⁵⁶

江戸町一丁目扇屋宇右衛門墨河と号す。妻をいなぎとて、夫婦とも、歌も書も千蔭門人にて、天明中の盛家なりき。亡兄したしかりし故、二人が短冊など、今猶家に残れり。墨河が親はちいさき娼家なりしに、墨河にいたりて^{たいか}大家になりしとぞ。天明の^{ころ}比、初代花扇、東江門人なり。……同じ時、同家の滝川は千蔭門人なり。千蔭も東江も、天明中の名家なれば、これが門人となしたるは、墨河が一つのはかりごとなるべし。

引用文中、「亡兄」とは京伝のこと、「初代花扇」は三代の誤りである。墨河は、二人の遊妓を大々的に売り出すに当たって、特技、教養の中でもとくに書に目を付け、それぞれ花扇を東江に、滝川を千蔭に入門せしめ、その書法を習得せしめた。かくて墨河のしたたかな智計が実を結んで、花扇は世に隠れもない名妓として喧伝され、書を以て詞人墨客と肩を並べもしたのである。花扇をここまで養育するのに、墨河の念頭に高尾の能筆ぶりが置かれていたことは想像に難くない。されば、「高尾太夫図」に花扇をして賛を認めさせたのも、墨河の智計の中と考えるとよからう。

[注]

- ①『稀書複製会』6期14(昭和4年刊、米山堂)。
- ②日本古典文学大系『西鶴集上』(昭和32年刊、岩波書店)186頁。
- ③Harold P. Stern “Freer Gallery of Art, Fiftieth Anniversary Exhibition, I. Ukiyo-e Painting” (Smithsonian Institution, Washington, May 2, 1973) pp.93-94.なお『浮世絵聚花』16(1981年刊、小学館)52頁にその日本語訳が見える。
- ④『大田南畝全集』12(1986年刊、岩波書店)308頁。
- ⑤東洋文庫『甲子夜話』2(昭和52年刊、平凡社)10頁。
- ⑥岩波文庫『誹風柳多留』3(1995年刊)319頁。
- ⑦同上『梅暦』上(1951年刊)31頁。
- ⑧新潮日本古典集成『閑吟集 宗安小歌集』(昭和57年刊)54頁。
- ⑨『日本随筆大成』3期2(昭和51年刊、吉川弘文館)316頁。
- ⑩『燕石十種』1(昭和54年刊、中央公論社)60-61頁。
- ⑪近世文学資料類従、仮名草子編35『遊女評判記集』中(昭和53年刊、勉誠社)270頁。
- ⑫日本古典文学大系『西鶴集上』168頁。
- ⑬新編日本古典文学全集『近世随筆集』(2000年刊、小学館)197頁。
- ⑭朝倉治彦編『江戸名所記』(昭和51年刊、名著出版)102頁。
- ⑮近世文学資料類従、仮名草子編35『遊女評判記集』中、276頁。
- ⑯『日本随筆大成』2期6(昭和49年刊、吉川弘文館)344頁。
- ⑰藤田利兵衛撰、貞享四年、江戸京橋小林太郎兵衛刊。横小本六冊。静嘉堂文庫蔵。整理番号、107・22。ただし元禄三年版の『江戸惣鹿子名所大全』等にも同様にある。
- ⑱三田村鳶魚編『鼠璞十種』上(昭和53年刊、中央公論社)38頁。
- ⑲天理図書館善本叢書『遊女評判記集』(昭和46年刊、八木書店)317頁。
- ⑳『大田南畝全集』17(1988年刊、岩波書店)372頁。
- ㉑注⑰参照。
- ㉒岩田隆著『宣長学論攷』(昭和63年刊、桜楓社)453頁。
- ㉓架蔵本、大本一冊による。刊記「安永二年癸巳秋八月／江戸書肆鑿書房刻」「須原屋市兵衛／同嘉助」。
- ㉔架蔵本、大本一冊。天明三年刊本の修訂版で、「寛政二年仲夏武陵源幹識」の跋文および抄釈を増補する。
- ㉕日本書誌学大系『三村竹清集』6(昭和59年刊、青裳堂書店)所収。
- ㉖『江戸文藝叢話』(平成7年刊、八木書店)。
- ㉗『洒落本大成』14(昭和56年刊、中央公論社)127頁。
- ㉘『国学史上の人々』(昭和54年刊、吉川弘文館)所収。
- ㉙『大田南畝全集』12、221頁。
- ㉚『稀書複製会』4期17(大正15年刊、米山堂)。
- ㉛フリーア美術館図書室蔵、大一帖。複製に『風俗絵巻図画刊行会叢書』本がある。
- ㉜注⑳参照。
- ㉝拙稿「千蔭流記聞」(『文学季刊』10ノ1、1999年冬)。
- ㉞注㉝参照。
- ㉟『稀書複製会』2期4(大正5年刊、米山堂)。なお国文学研究資料館に良刷の一本がある。

*** 討議要旨**

Sandy Kita氏は、奥村政信と花扇との関係は、と尋ね、発表者は、時代が違うので直接の関係はないが、寛政頃になると、菱川師宣風の吉原風俗画がもてはやされたりしたので、この場合も墨河あるいは京伝にそのような懐古的な趣味があったのかもしれない、また、この絵が吉原に伝存した可能性もあるだろう、と答えた。

座長の中島国彦氏は、ほかの浮世絵師も高尾を描いているのか、と尋ね、発表者は、あると思うが、こういった美人画の場合、モデルが特定しにくい、この絵は家紋から少なくとも彼らは高尾と認識して高尾の手紙を賛としたのだろう、と答え、また、その手紙が、天明4、5年頃の『一話一言』以前に載っている文献があれば御教示願いたい、と発言した。

福田秀一氏は、賛にある「忘れねばこそ思ひ出ださず」という文句は、『閑吟集』『隆達小歌』にある小歌をアレンジしたものである、と指摘し、発表者は、それは初めて知ったことでご指摘に感謝したい、と答えた。（この指摘は論文中に取り込まれている）

座長の中島氏は、芝居や実録などによって育まれた共同の幻想のようなものが、一枚の絵の中から読み取れるという、興味深い発表であった、とまとめた。